

呉錦堂を語る会通信

NO.42 Dec. 2018

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋 雄三 方 「呉錦堂を語る会」
Tel. 078-911-1671
編集 「呉錦堂を語る会」編集委員
発行日 2018年12月1日

呉錦堂の東亜セメント（株）経営

「呉錦堂を語る会通信」では、呉錦堂の事蹟をこれまで順不同で数多く取り上げてきました。しかし、尼崎市における東亜セメント(株)の創業・経営については、非常に重要な事業であるにもかかわらず、第41号に至るまで全くふれずに来てしまいました。

この度、機会を得て、尼崎法務局で旧土地台帳を閲覧し、続いて、初島の東亜セメント(株)跡地を訪れることができました。

今回入手した情報をここに報告いたします。新たな知見をお寄せいただければ幸いです。

(編集委員 橋 雄三)



東亜セメント(株)のあった(尼崎市)初島は大阪湾に流入する神崎川の中州に形成された土地で、手前、左門殿(さもんど)川を隔てて向こう岸が東亜セメント(株)跡地あたりです。右手至大阪湾。2018年10月、編集委員撮影。

《呉錦堂及び長男啓藩と東亜セメント(株)》

尼崎市立地域研究史料館の絵はがきデータベース(PCD)に右の画像が掲載されています。

東亜セメント(株)が昭和三年盛夏、社長呉啓藩名義で出した暑中見舞はがきです。

編集委員が撮影したこのページ冒頭の2枚の写真と見比べてください。手前の運河に浮かぶ船の様子を含め、非常に興味深い画像です。PCDでは、工場の所在地は、「兵庫県尼崎市大洲村初島字ヌノ割178ノ1」と記述されています。

はがき右上部のマークは商標でしょうか。セメント樽にTCの文字は、呉錦堂の会社、義生洋行が中



国で販売したマッチのラベルにも使用されています。

呉錦堂と東亜セメントの主要年表

事 項	年 次		資本金	備 考
東亜セメント設立	1907	M40.1.16	500千円	尼崎町大洲村初島
製造休止	1909	M42.12.1		M43.4.5まで製造休止
小東野開墾事業認可	1910	M43		セメント樽加工
田岡式セメント石合資会社設立	1911	M44.2.21	呉5万円、武藤1万、田岡1.5万	
資本金減		M44.5	300	
松海別荘竣工		M44.6.19		呉、住所を舞子へ移す
田岡式セメント石合資会社合併	1912	T1.12.1	375	
移情閣上棟	1915	T4.5.12		
資本金増額	1920	T9.6	1500	セメント石工場土地売却
呉錦堂死去	1926	T15.1.14		
長男呉啓藩社長就任		T15.7.3		
浅野セメントへ経営譲渡	1935	S10.9.30		公式合併(1942年)までは社名存続

左の表は、塚原淳・足立裕司論文「木骨コンクリート・ブロック造とその成立過程に関する研究・移情閣と東亜セメントの事例を通じて」に掲載の年表を編集委員が一部加筆したものです。表中、セメント石とはコンクリート・ブロックのことで、移情閣の建築に使用されています。

初島における呉錦堂の土地所有

初島における呉錦堂の土地所有について、神戸地方方法務局尼崎支局で調べた結果を報告いたします。閲覧可能な最も古い台帳が昭和24年作成のもので、残念ながら、呉錦堂の土地取得の詳細が確認できる時期の台帳を閲覧することはできませんでした。旧土地台帳の閲覧はどこの法務局でも簡単ではありません。通常の閲覧サービスの域を越えているようです。尼崎支局の場合、いろんな事情で、実際に存在しないのかもしれませんが。存在していても、閲覧に供せるほどには整備されていないのかも知れません。

《旧土地台帳からわかったこと》

閲覧できたのは、すべて、右のようなものでした。白い矢印と部分拡大は編集委員の加筆・加工です。

東亜セメント(株)は1942年、浅野セメント(株)(1947年、日本セメント株式会社に社名変更)に吸収合併されます。土地台帳が作成された昭和24年(1949年)という、その後のことです。

下記、日本セメント北初島町土地所有明細の地番から推定すると、この時期、日本セメント(株)は元の東亜セメント(株)所有地のほぼ全体、1万5千余坪(東京ドームとほぼ同じ面積)を所有していたこととなります。そして、呉錦堂合資会社は、なお、その周辺部に2万坪を超える土地を所有していたのです。

かつて、初島の土地所有に関し、呉錦堂の孫、伯瑄氏が、「尼崎に5万坪近い土地を持っていました。(中略)戦後、だいぶ経ってから売却しました」とおっしゃったことがあります。符合します。



① [呉錦堂合資会社北初島町土地所有明細]

番号	地番	地目(単位)	地積	登記名義	所有権移転先及び年月日
1	9	雑種地(反)	2.022	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)
2	12	雑種地(反)	8.023	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)
3	13	雑種地(反)	7.816	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)
4	15	宅地(坪)	3346.28	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)
5	17	宅地(坪)	2437.72	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)

② [呉錦堂合資会社南初島町土地所有明細]

番号	地番	地目(単位)	地積	登記名義	所有権移転先及び年月日
1	11-1	宅地(坪)	4283.79	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)
2	12	宅地(坪)	4822.54	呉錦堂合資会社	S28.9.10 尼崎肥料(株)

左表①②計7件
地積合計
20,299.33坪

③ [日本セメント東初島町土地所有明細]

番号	地番	地目(単位)	地積	登記名義	所有権移転先及び年月日
1	21	宅地(坪)	82.87	日本セメント(株)	S27.9.16 (株)東京芦野組
2	22	宅地(坪)	365.56	日本セメント(株)	S27.9.16 (株)東京芦野組
3	24	宅地(坪)	445.84	日本セメント(株)	S27.4.16 垂井吉松

④ [日本セメント北初島町土地所有明細]

番号	地番	地目(単位)	地積	登記名義	所有権移転先及び年月日
1	16	宅地(坪)	15671.49	日本セメント(株)	S27.9.16 (株)東京芦野組

⑤ [日本セメント南初島町土地所有明細]

番号	地番	地目(単位)	地積	登記名義	所有権移転先及び年月日
1	1	宅地(坪)	650.88	日本セメント(株)	S27.9.16 (株)東京芦野組

左表③④⑤計5件
地積合計
17,216.64坪

尼崎版「土地の神話」

「呉錦堂と尼いも畑」

作 / 井上 眞理子

I

どこまでも続くイモ畑をふたりの女が歩いていく。

前を歩く女は幼児のように足元がおぼつかないが、異国の服に包まれた体と、その横顔は目がさめるように美しい。後ろをいくのは侍女なのだろう、こちらはまるで田舎女のなりである。

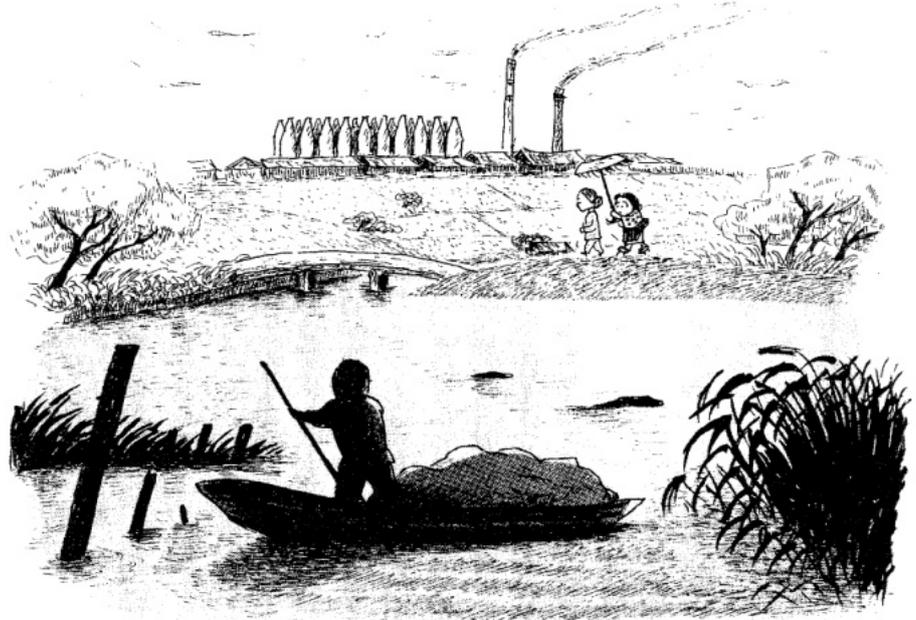
「ああ、今日も呉錦堂の奥方が行く」彼女たちの散歩は、初島の西端に出現したセメント工場とともに、イモ農家の人たちにいつしか見慣れたものとなっていた。

そんな八十年以上も前の話を、もと尼いも農家の矢野實さんにうかがったことがある。よちよちと纏足でイモ畑を歩く美しい異国の女の姿が、夢の中の光景のようにいつまでも私の心に残った。

呉錦堂の名を二度目に耳にしたのは、現在伊丹に住む戎市郎さんから尼いもについて聞き取りをした折である。戎家は矢野家同様、代々つづく尼いも農家で、祖父の代には旧尼崎町の初島や松島に二町の土地を持っていた。戎さんは父親から祖父の卯之助さんの話をよく聞かされた。

「呉錦堂という華僑がやってきて、初島の人らに土地を売って売って言うたんやそ

うです」卯之助さんは土地を売る気はなかったが、農家の大半は、セメント工場を建てるとい



う呉錦堂の話に乗った。呉は一反二百円だった土地を五百円で買うと言った。五百円手に入ると、銀行の利子(当時年七歩くらい)が年三十五円になる。畑一反で五十円くらいの収入があったが、遊んで三十五円になるならその方がよいと、乗り気になった者も多かった。

卯之助さんはひとり反対していたのでは、村八分になるというので、仕方なく土地を

手放した。明治の終わり頃である。明治四十年、尼崎町初島に東亜セメントが操業を開始する。

呉錦堂は、明治から大正にかけて活躍した華僑である。明治十八年長崎に渡り、やがて大阪へ進出、神戸に來たのは明治二十三年頃であった。雑貨貿易に従事する一方、瀧川□□の経営する清燧社のマツチ販売を引き受け、他に棉花の貿易等で巨大な富を得て、日本華僑社会の中心となった。

明治三十四年、鐘紡株五百株を手に入れたことを皮切りに、呉は一介の貿易商から、実業家としての道を歩みだす。神戸瓦斯株式会社や内外綿株式会社などの株式投資、さらには土地投機へと資産の展開を図っていく。

そのあたりの事情は『日本華僑と文化摩擦』(巖南堂書店)に収録された山口政子氏の論文「在神華僑 呉錦堂について」に詳しく、山口氏の論文から不勉強な私は呉錦堂の足跡を学ぶことができた。中でも興味をひかれたのが、やはり東亜セメント建設のいきさつである。

鈴久事件と呼ばれる株騒動から手を引いた年(明治三十九年)、呉は故郷の慈谿県東山頭に里帰りする。東山頭は餘姚県に境を接し、棉花栽培の盛んなところであったが、海岸部のため土地が低く始終浸水や塩害があったという。水害に苦しむ人々を見て、彼は水利灌漑事業を思い立つ。その水利事業に必要なセメントの需要に着目して、東亜セメントを設立したというのだ。

(次頁へ続く)

2

(前頁から続く)

話をふたたび、初島の戎卯之助さんに戻したい。

卯之助さんは、しかたなく呉錦堂に一町ほど土地を売ることにした。けれど、卯之助さんもさるもの、もし十年経っても工場が建たなかったら、二反だけでも元値(一反五百円)で返して欲しいと条件をつけた。十年経ったとき、卯之助さんの土地は工場敷地からは外れていたのか、結局なにも建たなかった。東亜セメントは二万坪の敷地だったが、呉は工場周辺の土地も買占めていたのだろう。

卯之助さんによると、初島の土地はそのころには一反一万円になっていったという(このあたりの土地の値段については、聞き取りによるもので、正確な数字とは言い難いが、東亜セメント経営報告書から類推すると大きな違いはないようである)。卯之助さんは二万円のものも千円で返してもらったことになる。といっても卯之助さんもそう簡単に土地を取り戻すことができたわけではなかった。元藩主の家柄で町長(明治三十八、四十二年)、市長(大正五、十一年)を歴任した桜井忠剛が仲介に入り、時間もかかったようだ。

やがて初島やその周囲には工場がどんどん建ち始め、戎さんの父である與一さんの代になると、戎家も農業だけでなく、工場経営などにも乗り出すのだが、卯之助さんは「百姓は土地だけを持ってた方がええ。お金を手にするところくなことにはならん」と口癖のように言って、尼

戎さんの話を聞いていると、土地買占めにやっ

てきた抜け目ない在神の華僑と、代々の土地を大切に思う農民との知恵比べのような情景が浮かんでくる。ただその割にどこかおっとりした印象なのは、話をしてくれた戎さんの穏やかな人柄のせいだろうか。かつての城下町として繁栄した尼崎町には、江戸の人々に通じるおらかな気風が残っていたようにも思える。

やがて初島の尼いも畑は、昭和九年の室戸台風の水害で跡形もなく消え去る。四メートルを超える高波が押し寄せたのだからといえはそれまでだが、大正ころから尼崎の臨海部では地盤沈下が進んでいた。そのころすでに臨海部には東亜セメントだけでなく、住友伸銅所や旭硝子などの大きな工場が操業を開始していたからだ。付近の農家ばかりでなく工場自体も地上げを行い、堤防に植えられていた松の木も、そのころには枯れてしまっていたというから、工場が地下水を大量にくみ上げたことが、台風の被害を大きくしたことには違いない。

呉が故郷を水害から救うために作ったセメント工場が、結果的には初島の農家から尼いも畑を奪い去ったとしたら、なんとも皮肉な話である。

国鉄舞子駅を出た電車が海辺をしばらく走るところ、古い松の木々の間に古びた洋館が見え隠れする。私はいつも電車の窓ガラスに額を押し付けるようにして、後方に消えようとするその姿を追ったものだった。

大正四年呉錦堂によって建てられた八角形の楼閣は、「移情閣」と呼ばれた。私はその姿に馴染んだのは、二十年以上前の話である。窓に打ちつけられた板は朽ち果て、うるこのような

壁は塗料が剥げ落ちていた。二度の台風に曝された跡の姿であったと後に知った。明石海峡を臨む舞子浜に忘れられたように建つその姿は、痛ましいというよりも異国からきた一人の男の孤独を思わせた。

呉錦堂という人物と尼崎との奇縁を書くことになった私は、久しぶりに移情閣を訪れた。遠い昔日本にやって来たひとり異邦人、呉錦堂の面影をふたたび偲ぶつもりであった。けれど訪れないほうが賢明だったかもしれない。舞子浜の海岸線を消し去った無骨なコンクリート護岸と、明石大橋の橋脚の袂に移築され修復された移情閣は、廃墟となっていた頃の姿よりも痛ましかった。

(井上眞理子様の許諾を得て、兵庫県郷土研究誌『歴史と神戸』第24号「聞き描き ありし日のまちと暮らし(9)」から転載させていただきました)



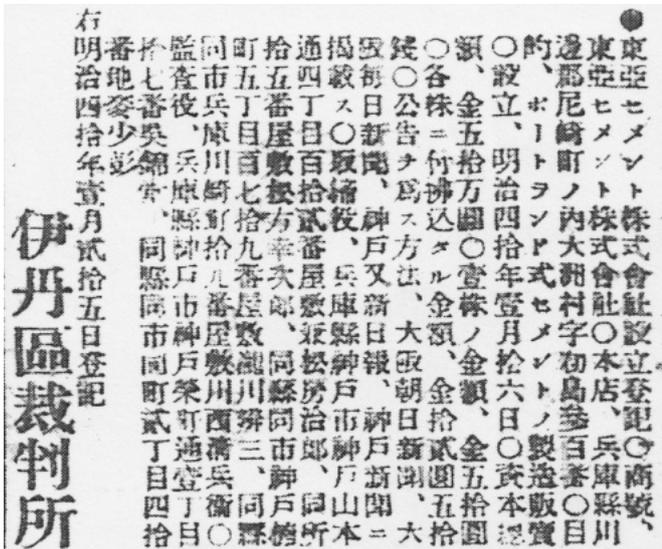
明石海峡を望む移情閣(1986年)
『孫中山記念館(移情閣)概要』
2001年(財)孫中山記念会発行 より転載

東亜セメント(株)関係資料

東亜セメント(株)関係資料で、本号第1、2、3及び6頁に載せられなかったものをここにあげます。

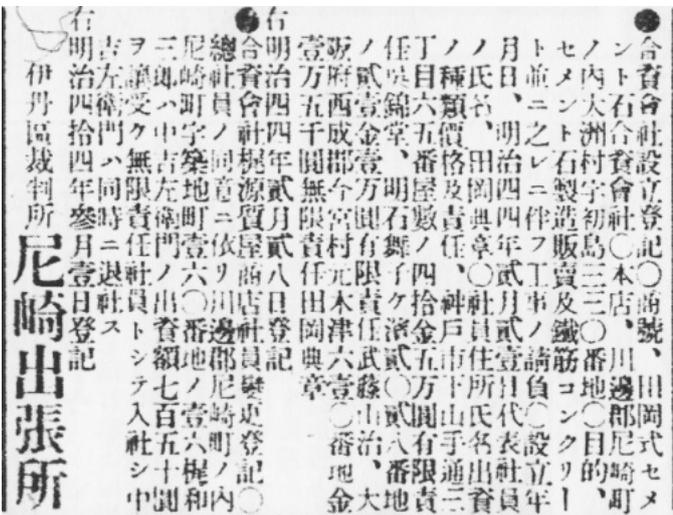
《1. 東亜セメント株式会社設立登記公告》

明治40年2月1日付神戸新聞の記事です。



《2. 田岡式セメント石合資会社設立登記公告》

明治44年3月8日付神戸新聞の記事です。



●合資会社設立登記○商號、田岡式セメント石合資会社○本店、川邊郡尼崎町ノ内大洲村字初島三三○番地○目的、セメント石製造販賣及鐵筋コンクリート並ニ之レニ伴フ工事ノ請負○設立年月日、明治四十四年貳月貳日代表社員ノ氏名、田岡典章○社員住所氏名出資ノ種類價格及責任、神戸市下山手通三丁目六五番屋敷ノ四拾金五万圓有限責任吳錦堂、明石舞子ケ濱貳○貳八番地ノ貳老金老万圓有限責任武藤山治、大阪府西成郡今宮村元木津六老○番地金老万五千圓無限責任田岡典章

右明治四十四年貳月貳日登記

伊丹區裁判所 尼崎出張所

《3. 『尼崎市史』より》

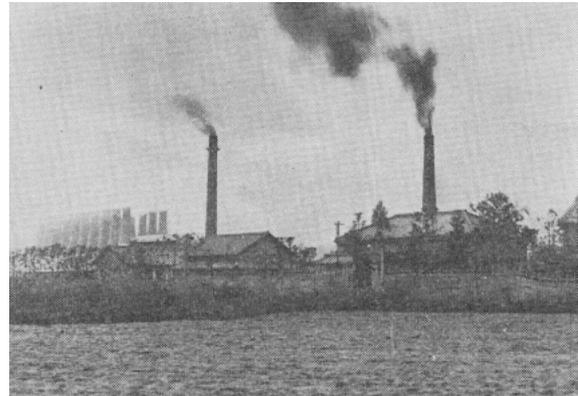
[初島に敷地2万坪の大工場]

昭和45年9月30日発行『尼崎市史』第3巻 383頁

「東亜セメント株式会社 — 帰化中国人呉錦堂の一族によって、明治40年資本金50万円で創立され、敷地2万坪の大工場を初島に建設した。しかし創立直後の恐慌で不振に陥り、43年に30万円に減資した」

[東亜セメント争議]

また、同著同巻487-488頁では、「東亜セメント争議と労働運動の定着」の小見出しで、「(大正10年)2月25日東亜セメント250余人の労働者は、15%の賃下げと労働時間延長に反対してストを決議するとともに、友愛会大阪連合会の支援を要請した。(以下略)」と、第一次世界大戦後恐慌期の労働争議のようすを記述し、加えて、「大正5年ごろの東亜セメント(尼崎市立図書館所蔵)」とコメントを付した写真(工場遠景)を載せています。この写真(↓)は本号第1頁の写真同様、左門殿川を挟んで初島を臨む構図になっています。



大正五年ごろの東亜セメント工場。『尼崎市史』より

《4. セメント樽は神出小束野の製材所から》



セメント樽製造風景(1910年撮影) 大きな柱の右寄りに丸鋸が見える

呉錦堂令孫、伯瑄（はくせん）氏を悼む

呉錦堂令孫、伯瑄氏を悼む

9月22日、呉伯瑄氏がお亡くなりになりました。奥様からの訃報に接し、あまりの驚きで、瞬時、ことばがでませんでした。

整った顔立ちで、髪も黒々、古い記憶をよどみなく話され、米寿が近いお年とは思えないほどお元気でしたので、とても、信じられません。

お会いするときは、いつも、ご夫婦ご一緒でした。芦屋駅前のホテルのロビーで、よく、三人でお茶をしました。呉錦堂が開拓した小東野(こそくの)のお祭りには、奥様が運転される真っ赤な愛車でこられました。昨秋、ご夫妻と、倉敷日帰り旅行を楽しみましたが、最後の思い出となってしまいました。

「呉錦堂を語る会」の顧問をお願いし、移情閣とは別に、舞子駅近くにあった居宅のこと、終戦の年(1945年)の6月5日神戸大空襲で全焼した籠池の家のこと、ただ一つ残ったヒマラヤスギのことなどなど、たくさんのお話をお聞かせいただきました。また、貴重な写真や資料も使用させていただきました。

「語る会」が存続し、機関紙「語る会通信」が発行できたのは、ひとえに、呉伯瑄氏のおかげと感謝しております。

ご冥福をお祈りいたします。

呉錦堂を語る会幹事 橘 雄三

2018年11月1日

略 歴	
1931	1月、上海で生まれる
	小学校、中学校（ともに明石）は舞子の上ノ山の居宅から通う
1945	6月5日、籠池の家で空襲に遭う。家屋は全焼
戦後	旧制明石中学3年で終戦をむかえる。旧制瀧川中学へ転校
	同志社大学に学ぶ
	大学卒業後、外国車（フォード）販売会社に入社。英会話が達者で、その上、呉錦堂の孫という知名度もあり、社内一の販売実績を上げる
1972	日中国交回復
1973	自動車会社に在籍中、中国側から請われ訪中。この時、明石市長から寧波との友好都市提携の親書を頼まれる（結果的には実現せず）
	オイルショックの影響もあり、外車は売れにくくなり、会社は解散。退社
	日中関係の好転で、日中双方の企業から、ビジネスの斡旋・仲介の依頼が舞い込むようになる
	呉錦堂有限公司(錦堂産業)設立
1979	神戸中華総商会(KCC)ビル5階に事務所を構える
	日中のビジネス環境の変化もあり事務所を閉じる。最後の仕事となる
2018	9月、ご逝去

■ 呉伯瑄氏との思い出（一）

呉伯瑄氏との思い出は尽きない。ここに、写真二葉をとりあげました。まず、2012年の2月、小東野のお祭りに参加した時の写真です（『呉錦堂を語る会通信第2号』）。



神出小東野村の呉錦堂顕彰碑前で村の皆さんと中央は呉伯瑄氏ご夫妻

■ 呉伯瑄氏との思い出（二）

今一枚は、08年7月、移情閣(孫文記念館)の応接室でお会いした時のものです。その時、呉伯瑄氏から聞いた話が頭に残っています。以下、伯瑄さんの話です。

小学生の頃、丁お祖母さん(呉錦堂夫人)は健在で(終戦の年に死去)、私が学校から帰ると、待ちかねたように自分の部屋に連れて行き、お祖父さんの話をよく聞かせてくれました。その頃、小東野開拓地の経営はまだ続いていて、秋になると、小東野からトラックで、薪や、炭や、柿や、ぶどうや、松茸などが運ばれてきました。舞子海岸の松の中には、小東野の松林から運ばれてきたものもあります。

